

●言語文化教育研究 国際研究集会 in ハノイ

(2019年12月7日・8日, ベトナム: ハノイ)

報告者: 森末 浩之 (タンロン大学/ハノイ日本語教育研究会, 主催者)

近年、日本語教育の現場では、教師が一方的に知識を伝達する方法からアクティブ・ラーニングやピア・ラーニングといった学習者同士の学び合いが行われるようになってきた。しかし、どのように実践に取り入れるかというノウハウばかりに目が向けられる傾向が強く、その背景にある理念が十分に検討されてはいないように思われる。そこで、言語文化教育研究学会、ハノイ日本語教育研究会、タンロン大学の共催で、2019年12月7日・8日にタンロン大学において、「言語文化教育研究 国際研究集会 in ハノイ」を「学習者・教師の学び合い」というテーマの下で開催した。

本国際研究集会では、日本語教育に関わる多様な人々の「協働」について、学習者、教師の学び合いの理念や様々な事例から、「学び合い」というものを多角的に考え、再検討を行った。2日間で、基調講演4本、特別フォーラム1本、口頭発表25本、パネル発表1本、企画フォーラム7本、ポスター発表18本を行った。日本、ベトナムのみならず、タイ、ウズベキスタン、カンボジア、中国、フィリピン、韓国から210名が参加し、大規模な研究集会となった。

1日目の午前には、早稲田大学教授で協働実践研究会運営者の舘岡洋子教授、そして、ハノイ大学日本学部学部長のギェム・ホン・ヴァン教授に、「協働の学びの場のデザインを問い直す」、「ハノイ大学日本語学部「観光日本語」授業へのアクティブ・ラーニングの導入事例」の題目で基調講演をしていただいた。午後は、分科会形式で、6部屋同時進行で口頭発表とパネル発表を行い、その後は、ポスター発表を開催した。

2日目は、企画フォーラムを開催した。技能実習生、教材開発への注目度は高かった。午後には、タンロン大学のグエン・ティ・オワイン准教授、目白大学の池田広子教授に「漢越知識は高等教育機関における日本語教育にいかに関与するか」「実践のプロセスを協働で振り返る教師コミュニティ」の題目で基調講演をしていただいた。そして、会の締めくくりとして、国際交流基金ベトナム日本文化交流センター、ベトナム日本語・日本語教育学会、ハノイ日本語教師会、ハノイ日本語教育研究会の代表が集結し、「教育機関の垣根を超えたつながりが生み出す日本語教育の未来」と題し、特別フォーラムを開催した。

2日間のプログラムを通して、シンポジウムの表題通りに、参加者同士の活発な意見交換、交流が行われ、参加者同士のつながりを生み出すことができた。ベトナム・ハノイにおける教育機関の垣根を超えた連携という点では、特別フォーラムにおいて、今後の協力関係の可能性を探りその第一歩となることを目指したが、様々な組織が手を取り合い、更に歩みを進める必要性が示唆された。現在のベトナムにおける日本語教育は、教師主導の一斉授業から、学習者を中心とした学習者の自律性を育む日本語教育への転換期であると言える。

だからこそ、ハノイ日本語教育研究会の活動理念としている教師間の意見交換や情報共有を、1人の教師から、その所属教育機関へと広げ、更にベトナム全体の日本語教育の発展につなげるという意識が、現在のベトナムの日本語教育には必要であろう。1人でできることは限られているが、力を合わせれば大きな目標でも必ず達成できるはずである。今回の国際研究集会で生まれたつながりを活かし、共に手を取り合いながら、ベトナムの日本語教育の発展に尽力していきたい。